

# 終末期にある患者におけるせん妄の看護に関する文献検討

山陽学園大学 看護学部 看護学科

本村 海渡

## I. はじめに

終末期せん妄は、死が近づくにつれて出現頻度は増加し、死亡直前で 83%みられる。終末期のがん患者にせん妄が発症した場合、患者の意思決定を困難にし、患者が望む療養生活や治療を妨げる可能性がある。また家族にとっても患者の死の受け入れを困難にし、負担増加させ、苦痛が強い。そこで終末期のせん妄の患者や家族に対しての看護を明らかにするために文献検討を行う。

## II. 研究方法

### 1. 研究期間

令和 2 年 4 月～11 月

### 2. 研究対象

医学中央雑誌 Ver.5 にて、「せん妄」「終末期」「看護」をキーワードとし、年代を絞らずに原著論文を検索。2020 年 9 月 1 日の時点で 56 件の文献がヒットした。このうち、研究対象者を看護師でないもの、海外の看護師を研究しているもの、褥瘡を研究しているもの計 13 件を除き、43 件を研究対象とした。

### 3. 調査方法・分析方法

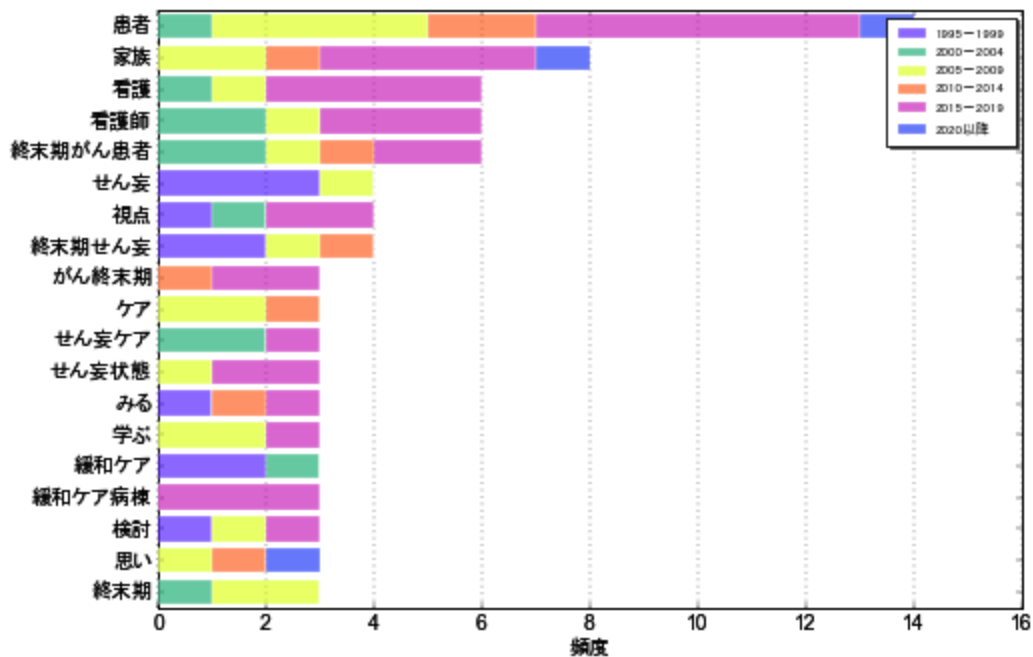
43 件の文献をタイトル・発表年別で分類し、Text Mining Studio 6.2 ((株) NTT データ数理システム) を用いて分析した。まず、文献タイトルを基本情報として算出した。次に、発表年のデータをビジュアル集計にかけて分析した。さらに、文献タイトルと 5 年ごとに区切った発表年を文献タイトルを係り受け頻度推移、ことばネットワーク、対応バブル分析を行った。

### 4. 倫理的配慮

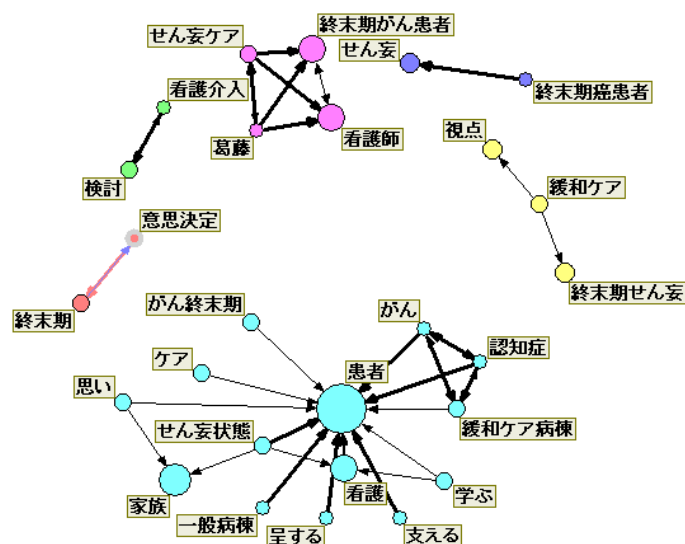
本研究における先行研究を引用する場合、著者名、発行年、掲載誌名を引用文献の記載方法に則り明記する。

## III. 結果

せん妄の研究は 1996 年より行われ、2013 年以降は増加傾向にある。単語頻度解析では、最も頻度が高かったのは「患者」であった。次いで「家族」「看護」「看護師」の頻度が高かった。1999 年までは、「緩和ケア」であったが、2015 年以降は「緩和ケア病棟」となっていた。また、「家族」は、2015 年以降はさらに増加していた。



ことばネットワークでは、I～VIの6つのクラスターに分類された。Iは、「患者」「家族」「看護」「がん」「認知症」「緩和ケア病棟」「一般病棟」であった。IIは、「終末期患者」「せん妄ケア」「終末期がん患者」「看護師」「葛藤」であった。IIIは、「せん妄」と「終末期癌患者」であり、IVは「看護介入」「検討」、Vは、「意思決定」「終末期」VIは「視点」「緩和ケア」「終末期せん妄」であった。研究方法は、「分析」「手法」として、「事例」による「報告」、「インタビュー」を「行う」であった。「インタビュー」は「対象」に対して行われ、「分析」「検討」されていた。



#### IV. 考察

2015年以降患者・家族、緩和ケア病棟を対象とする研究が増加している背景には、WHOが2002年に緩和ケアの定義の改訂、2007年の患者と家族の意思決定に関する「終末期医療の決定プロセスのあり方に関するガイドライン」の厚生労働省発表、緩和ケア診療加算2002年に新設されたことにあると考える。

せん妄状態の終末期がん患者やせん妄状態の認知症患者へのケアや看護の研究が行われていた。家族に対してもケアが必要であり、患者だけではなく家族を支える必要がある。終末期がん患者はせん妄を発症しやすく、患者の意思決定をすることが困難になり、どのように患者や家族の意思決定がなされているのかが研究されていた。そのため、看護師のせん妄ケアに対する葛藤の研究があった。研究方法は、インタビューや事例検討である。このことは、せん妄の患者への質の高い看護を行うことを目指すための研究を行っていると考えられる。

#### V. 結論

1. 終末期せん妄に関する研究は2013年以降増加傾向にあり、2015年以降、緩和ケア病棟及び、患者・家族を対象とした研究である。
2. 終末期せん妄に関する研究は、認知症・がん、終末期患者の複数の要因に関する研究および、看護師の葛藤に関する研究である。
3. 終末期せん妄に関する研究方法は事例検討・分析していて、質的研究が主である。

#### VII. 謝辞

本研究で分析を行うにあたり「Text Mining Studio 6.2」を使用させていただきました株式会社 NTT データ数理システム様に感謝申し上げます。また、山陽学園大学 林由佳准教授には、研究の進め方や枠組みについて有益な助言をいただきました。感謝申し上げます。